

主 題：主を待ち望む

聖書箇所：詩篇 27 篇

テーマ：どんな時も”主を待ち望む者”として成長するために

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは、詩篇 27 篇です。聖書お持ちの方はどうぞお開きください。まず、いつものようにみことばをお読みします。

詩篇 27 篇 ダビデによる

「1 【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。：2 悪を行う者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはつまずき、倒れた。：3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。：4 私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。：5 それは、主が、悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所に私をかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。：6 今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私はその幕屋で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、【主】に、ほめ歌を歌おう。：7 聞いてください。【主】よ。私の呼ぶこの声を。私をあわれみ、私に答えてください。：8 あなたに代わって、私の心は申します。「わたしの顔を、慕い求めよ。」と。【主】よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。：9 どうか、御顔を私に隠さないでください。あなたのしもべを、怒って、押しのけないでください。あなたは私の助けです。私を見放さないでください。見捨てないでください。私の救いの神。：10 私の父、私の母が、私を見捨てるときは、【主】が私を取り上げてくださる。：11 【主】よ。あなたの道を私に教えてください。私を待ち伏せている者どもがおりますから、私を平らな小道に導いてください。：12 私を、私の仇の意のままに、させないでください。偽りの証人どもが私に立ち向かい、暴言を吐いているのです。：13 ああ、私に、生ける者の地で【主】のいつくしみを見ることが信じられなかったなら—：14 待ち望め。【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。」

皆さんは、“何かを待ち続ける”ということは得意でしょうか？私自身はあまり得意ではありません。たとえば、店に買い物に行って精算をするとき、皆さんならどうします？できるだけ短い列のところを見つけて、その中でもできるだけ前の人のカゴの品数が少ないところを探そうとしません？私だけですか？また、車で移動している最中に渋滞に会うとき、皆さんならどうするでしょう。できるだけナビを調べて混んでいない道を必死に探すかもしれません。急いでいるときに渋滞に会おうものなら心が騒いで、不満や文句を口にしてしまうかもしれません。パソコンやスマホで調べ物をしているときに画面がうんともすんとも言わなければ？だれかと待ち合わせをしているときに電車やバスが遅れていれば？はたして、私たちは忍耐を持って待ち続けることができるでしょうか？今挙げたものは、ある人には、何の問題もないと言われるかもしれません。でも、私たちの生活の中にあふれている“待つ”ということは、そのようなささいなものだけではないのです。たとえば、病院で受けた何らかの検査の結果を待つことや、将来に関わる大きな試験の結果を待つことや、仕事で上司からの報告を待つこと。また、何よりも、私たちは試練や苦しみを経験する中であって、助けを祈り求め、その祈りに対する主の答えを待つこともあります。自分には先が見えない、理解できない中で、主に自分の身をゆだねて信頼して待つのです。では、皆さん、はたして、私たちはいろいろなことが起こる日々の生活の中で、主を待ち望む者として今を歩んでいるのでしょうか？それとも、主に信頼してすべてをゆだねることよりも、いつも疑いや不安を覚えてしまったり、自分の考えや思いを優先していないのでしょうか？

きょう私たちがこの詩篇27篇を通して考えていくことは、タイトルにもあるように「主を待ち望む」ということです。残念ながら著者ダビデがこの詩篇を記した時、どのような状況に彼が置かれていたのかはわかってはいません。もしかしたら、これはダビデがサウル王に追われていた時に記したのかもしれないし、息子アブシャロムに攻め立てられている時に記したのものかもしれません。言えるのは、ダビデがこの詩篇を記した時、彼はひどい困難の中に置かれていたということです。でもその中で、彼は変わらず主を待ち望む者として歩んでいました。

この詩篇の内容を見ていく前に最後のことばをもう一度見てください。14節でダビデはこんなことばをもってこの詩篇を締めくくっていました。「待ち望め。【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。」ダビデは苦難の中にあつて、変わらずに神様に確信を置き続ける者でした。先の見えない状況にあつて、心がくじけ、恐れや不安がきても仕方のないような中で、彼は主を待ち望む者として歩み続けていたのです。そして、そのダビデが、今を生きる私たちひとりひとりに対しても言うのです。「心を強くして、主を待ち望みなさい」と。そう聞いて、そのようなことがどうして可能なのだろうか、今の自分の状況で、揺るがされることもなく、希望を失うことなく熱心に主を待ち望み続けることなど、はたしてそんなことが自分にできるのだろうか、そのように思う方があるかもしれません。もしそのように考えている方がおられるなら、きょうのみことばによく耳を傾けてください。1節から順に見ていきますが、ダビデは、どうして自分が主を待ち望む者として揺るがされることがなかったのか、を教えてください。特に、主を待ち望むために必要な四つの態度を、彼はここで示してくれているのです。その態度を学ぶことを通して、私たち自身も主を待ち望む者として、ますます成長することができるように、その励ましと助けになることを心から祈っています。では早速、見ていきましょう。

## ○主を待ち望むために：四つの態度

### 1. 主の姿を思い起こし続けること 1-3節

主を待ち望むために必要な一つ目の態度が1-3節に記されていました。一つ目の態度は「主の姿を思い起こし続けること」です。「:1 【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわらう。:2 悪を行う者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはつまずき、倒れた。:3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。」と。苦難の中に置かれていたダビデがまずしたことは、主がどのようなお方か心を留めることでした。自分自身の信頼する主がどのような存在なのかを覚え、その主の姿に、彼は確信を見出していたのです。特にここで彼は、三つの主の姿を取り上げていました。

### ●ダビデが覚えた主の三つの姿 1節

#### a) 私の光

まず一つ目の姿は、主が私にとっての「光」だということでした。この「光」ということばにはいろいろな意味があります。たとえば、これは「暗闇とはいっさい関わりを持たない、主の完全な聖さや義」、また「栄光にあふれている姿」を表すこともあります。また、「主が人々の歩むべき真理の道を照らしてくれる存在である」ことを表してもいます。またそれだけではなく、「主が喜びや祝福、恵みの源である」ということをも意味しています。以前見た詩篇4篇でもこのように用いられていました。詩篇4:6-7を見ると「:6 多くの者は言っています。「だれかわれわれに良い目を見せてくれないのか。」:7 【主】よ。どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。あなたは私の心に喜びをくださいました。…」と書かれていました。思い返せば、詩篇4篇を記したときも、ダビデはひどい苦しみを味わっていました。特に、彼は自分の息子アブシャロムにいのちを狙われて、悲しみと失意のどん底にいたのです。ダビデについて来ていた周りの者たちも、この状況の中で本当にこれから良いことなどあるのだろうか、私たちをこの苦しみからだれが助け出してくれるのだろうかと思い悩んでいたの

す。しかし、ダビデは、主に向かって言いました。「【主】よ。どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。」と。その結果、彼の心に、主が喜びをもたらされたのです。このダビデの姿は詩篇27篇でも同じでした。彼は同じように苦しみを味わう中にあって、ほかのだれでもない主の姿に目を向けて、主は私の光なのだ、と身をゆだねていたのです。言い換えれば、彼は主が自分自身にとっての喜びや恵みの唯一の源であること、この方こそが自分にあわれみを示してくださり、暗闇の中で進むべき道を照らしてくださる光だ、と覚えていたのです。彼は良い時も悪い時も、どこに自分に必要な喜びや恵みや導きがあるのかを忘れていませんでした。だからこそ、彼はその源である主の姿を思い出し続けるのです。

#### b) 私の救い

二つ目の姿として挙げられていたのは、「主が私にとっての救い」だ、ということでした。この「救い」ということばは、「だれかを救い出すこと」や「だれかを助け出すこと」の意味があります。そして特に旧約聖書の中では、困難や試練に会っている者たちが、肉体的にそこから助け出されるということを表していました。まさにそれこそ、この場面でダビデが必要としていたものでした。ダビデはこの時、敵にいのちを狙われていました。この先、何が起こるのかは分かってはいませんでした。もしかしたら、次の瞬間に敵に攻撃されて死ぬかもしれない、そんな恐怖や暗闇が彼の前には広がっていたのです。しかしその中で、彼は主に目を向けました。そして、主が自分をその状況から助け出してくださる救いである存在だ、と信頼しました。置かれている状況に対して、主だけが、自分に勝利を与えてくれるお方だとわかっていたのです。だからこそ、彼は、自分の周りの人間や自分自身などといった主以外のほかの何にも目を向けようとはしませんでした。彼は、どこに自分に必要な助けがあるのかを忘れなかったからこそ、自分の主に心を留め、その主の姿を思い出し続けていたのです。

#### c) 私のいのちのとりで

そして三つ目の姿として挙げられていた主の姿は、「主は私にとってのいのちのとりで」だということでした。この「とりで」ということばには、「力」や「要塞」、また、「堅固なとりで」といった意味が含まれています。つまり、ダビデにとって、主というお方は最も安全に身を寄せることができる揺らぐことのないとりでだ、ということです。どんなに強大な敵の攻撃を受けることがあろうとも、自分の主は壊れることなく崩されることのない、そのような巖、避け所なのだ、とダビデは信頼していました。彼はどこに自分に必要な守りがあるのかを忘れなかったからこそ、その主の姿を思い出し続けていたのです。こうしてダビデは、主の三つの姿、主が自分にとっての光であり、救いであり、いのちのとりでである、ということを中心に留め続けていました。この主が自分とともにいてくだされば、どのようなくとも絶対大丈夫だと確信して、身をゆだねていたのです。

では、いったい、ダビデはこの確信をどこから得ていたのでしょうか？なぜ彼は、自分の主が光であり、救いであり、いのちのとりでなのだということを疑うことがなかったのでしょうか？それは、彼自身の過去の経験からそのことを知っていたからでした。2節にこう記されています。「悪を行う者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはつまずき、倒れた。」ダビデはこれまでも数々の敵に襲われることがありました。悪を行い、彼を傷つける者たちによって、いのちを狙われることがありました。人間的に考えれば、肉体的にも精神的にも疲れきって希望を失っても仕方がないような場面に彼は何度も直面していたのです。しかし、どんな敵が迫ろうとも、どんな悪が行われようとも、ダビデは滅ぼされることはありませんでした。神様が彼を守っておられたからこそ、彼は暗闇の中で路頭に迷うこともなく、逆に彼の敵はつまずいて倒れていったのです。ダビデはそんな自分自身の過去をふり返って、主への信頼をいっそう深めていました。確かに、私の主は希望を失って暗闇に襲われたときも心に喜びを与えてくださった、確かに主はどうすることもできなかった敵から守ってくださり、困難から助け出してくださった、確かに私の主はいつも変わることがない誠実な助けの主なのだ

と。そのように主の姿を覚えたダビデの心は、どうなったと思います？彼はくり返し1-3節の中で訴えるのです。特に1節と3節にこのように書いていました。「1 【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。…3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れぬ。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。」と。「だれを私は恐れよう。だれを私はこわがろう。私の心は恐れぬ。私は動じない。」これがダビデの持っていた揺るがぬ確信でした。主が光であり、救いであり、とりであるということ—そんな主の姿を思い起こしていたからこそ、彼はたとえ困難な状況にあらうと希望を見出すことができていたのです。彼自身のうちに何かしらの力があつたからではありません。ただ、主の力により頼んでいたからこそ、彼の心は揺るがされることはありませんでした。苦しみの中で彼を支え彼を強めたのは、変わらない主の誠実な姿だったのです。思い返してみれば、パウロも同じようなことばを述べていましたね。ローマ8：31で「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」このように、どんなお方がともにいてくださるのかを覚えるということは、かつての信仰者たちにとって、苦難の中で希望や喜びを見出すために欠かすことのできない大切な秘訣でした。

時に、私たちも、次の瞬間何が起こるのかわからないようなこと、先が見えない不安な状況に陥ることがあります。自分の目の前で起きているにもかかわらず、自分には何もすることができずに状況だけがどんどん悪くなっていくような場面に出くわすこともあるかもしれません。では、そのような場面に直面したら、私たちならどうするでしょう？多くの方は、「もちろん神様に信頼します」と言われるかもしれません。それはすばらしいことです。でも同時に、そのように私たちが信頼しようとする中で、こんな誘惑に直面することはありませんか？それは、神様に対して間違つた考えを抱く、という誘惑です。苦しみを覚えて傷つくときに、私たちはみな熱心に祈ろうとします。神様に助けを求めて、神様、どうかこの問題を取り除いてください、どうかこの状況を改善してくださいと願うのです。でもその祈りに対する答えをすぐに手にすることができなかつたら、自分の望む時に問題が解決せずに、神様の時を待たないといけなければ、私たちは神様に対して誤つた思いを抱くかもしれません。自分がこんなにも苦しんで熱心に祈っているのに、状況は一向に変わらない、まだ助けを与えてもらえない、神様は自分のことなど本当に心に留めてくださっているのだろうか、いやそもそも神様は助けなど与えることができるのだろうか？このまま信頼し続けていて本当に大丈夫なのだろうか？やっぱりほかの何かにも助けを求めることが必要なんじゃないか？…そのような思いが私たちの心の内に生じてくれば、私たちは主を待ち続けることに難しさを覚えるようになるのです。そして代わりに、神様に対して怒りや不満、また苦しみを覚えたり、自分の力や知恵によってどうにかして自分の思い通りにしようとするところがあるかもしれません。だからこそ皆さん、私たちがくり返し、くり返し覚え続けなければいけないことは、神様は良い時も悪い時も私たちの思いや状況によって変わることはないお方だ、ということです。

考えてみてください。私たちが神様を見上げるとき、その神様の姿は、いつもにみことばに記されている神様の姿でしょうか？それとも自分が置かれている状況や自分の感じていることによって変わってしまうものでしょうか？ダビデがまずしたことは、主の姿を正しく思い起こし続けることでした。

何度も言いますが、苦しみの中にいた彼には、この先に何が起こるのかは分かっていませんでした。敵の脅威が迫る中であつて、彼自身は無力で何もできなかったのです。自分の状況に対する答えを神様が与えてくださっていたわけでもありません。でも、彼はそんな不安に襲われても仕方のないような中で、神様はどのような状況にあつても助けを与えることができるのだと信じました。自分には手に負えなくても、神様にはどのような問題も難しいものはないのだと信頼しました。そして、その主への信頼が、彼の心に「だれを私は恐れよう」と言える大胆さを生み出していたのです。

感謝なことに、私たちも同じように覚えることができます。確かに、私たちの生活の中に起こってくる問題には、理解できないことも手に負えないこともあります。でも、私たちはみことばを通して、主が喜びや恵みの源であること、主が私の光であり、どのようなときにも必要な助けや守りを与えてくださる救いやいのちのとりでである、ということを知って、この方に信頼し続けることができるのです。私たちにはどうにもできないことがあります。でもどんな問題も、この神様の手に負えないものではありません。たとえ私たちに理解できなかつたとしても、この方はすべてのことをご存じで、すべてのことを支配しておられるのです。このように偉大なお方が私たちとともにおられるのなら、私たちもダビデやパウロと同じように言えないでしょうか？「だれを私は恐れよう」と。主の姿を思い起こし続けること、これが主を待ち望むために必要な一つ目の態度でした。

## 2. 主の姿に喜びを見出し続けること 4-6節

続けて、主を待ち望むために必要な二つ目の態度が4-6節に記されています。二つ目の態度は、「主の姿に喜びを見出し続けること」です。4-6節「:4 私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。:5 それは、主が、悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所に私をかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。:6 今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私は、その幕屋で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、【主】に、ほめ歌を歌おう。」苦難の中で主の姿を1-3節で覚えたダビデでしたが、次に彼がしたのは、その主の姿をただ熱心に求めることでした。彼は自分の身にどんな困難が降りかかることがあろうとも、どんな難しい状況に置かれることがあろうとも、主のうちに喜びを見出すことを、ほかの何よりも求めていたのです。このように4節は続いていました。「私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。」

### ▶「主の家」

ここで出てきていた「【主】の家」というのは「幕屋」や「聖所」のこと、言い換えれば「主の臨在を表す場所」のことを指していました。主がおられる場所のことを指していたのです。つまりここでダビデが言わんとしたのは、彼は自分の生涯において、どんなときもいつも主とともにいることを願っていた、ということです。彼は主を心から愛していたからこそ、その主がおられる場所に自分も常にいることを望んでいました。でもダビデは、単にその場所にいることを望んでいたわけではありません。ある目的があり、あることを願っていたのです。その目的が、4節の続きに記されていました。「主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」

### ▶「主の麗しさ」

ここで出てきている「【主】の麗しさ」とは、「主のご性質そのもの」のことです。主のすべてのご性質…主の力や知恵、誠実さや愛、聖さ、義、完全さ、そういったものを表していました。ダビデはそのような美しい姿を仰ぎ見て、そして思いにふけろうとしたわけです。「思いにふける」とは何なのか？「思いにふける」というのは、「何かを調べる」とか「何かを探し求める」「思いを巡らせる」といった意味が含まれています。「思いにふける」というのは、何かに心を思い巡らせるということです。つまり、ダビデは単に神様の姿を覚え続けただけではなく、その姿に思いを巡らせて、そのすばらしさを自分のものとして味わおうとしていたということです。言い換えれば、彼は単に知識として主を知っていただけではなく、その主の麗しさに心を留めて、そこに自分の喜びや満足を見出そうとしていました。そして皆さん、これは私たちにとっても主を待ち続けるために大切なことです。もちろん私たちにとって、主がどのようなお方かということを知ることは重要です。主がどれほどすばらしいお方なのかということのみことばから知識として知ることが必要です。でも同時に、それを自分の心の内で思い巡らして、その真理を自分の喜びとすることも欠かせないのです。では、具体的にどのようにしてこれをするのか？今週一週間の中のどこかでそれぞれやってみてください。日々の生活の中にあふれている神様

の恵みやあわれみ、神様の変わらない約束、神様の変わらない誠実さ、そういったものを目にするとき  
にそれを書き出すのです。そして、そのことを覚えるときに、今も生きておられる神様がどのようにそ  
れぞれの歩みに働かれているのかをよく覚えて、その神様に感謝すること、賛美をささげることで  
す。そのようにして、私たちは主のすばらしさ、主の麗しさを覚えて、そこに喜びを見出そうとするので  
す。主の麗しさを仰ぎ見て、そこに自分自身の喜びや満足を見出し続けようとするのです。ダビデは何  
よりもそのことを主に対し望んでいました。主とともにいるということが、ほかの何よりも彼が願っ  
ていたことでした。

皆さん、さっと聞けば、そうなのかと思われるかもしれませんが、ダビデはこのとき苦難の中に置か  
れていたのです。彼の身にはいのちの危険が迫っていて、さまざまな敵の攻撃によって傷ついていま  
した。彼のからだも心も疲れ切っていたことでしょう。これがもし、息子アブシャロムに追われている  
時であれば、彼は王座や自分の持っていた快適な生活や富さえも失っていたのです。では、もし、私  
たちが彼の立場だったとしたら、私たちは何を一番に求めようとするのでしょうか？彼は容易にほかの  
ものを望むことができました。身の安全や快適さ、富…あらゆるものを求めることができました。そし  
て確かにこの後を見ていけば、神様に敵からの助けを祈ってはいました。でも、彼の心はどんな時も、ま  
ず、主とともにいるということを願っていたのです。良い時も悪い時もどんな状況にあらうとも、彼は  
ただ主だけを求めていました。すごいと思いませんか？私たちはできます？いったいなぜ彼は、このよ  
うにただ主だけを求め続けていたのでしょうか？その答えが5節から記されていました。「5 それは、主が  
悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所にかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。6 今、  
私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私はその幕屋で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、  
【主】に、ほめ歌を歌おう。」と。ダビデはなぜ主を求め続けていたのか？それは、主が悩みの日に自分  
を敵からかくまってくださり、敵の攻撃の手から届かない所に自分を上げてくださると確信していたか  
らでした。6節に「私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。」書いていますが、この表現  
は、主が敵に対する勝利をダビデにもたらず、ということを表す表現でした。ですから、自分の主が、  
どのような状況にあらうとも、必要な助けや困難に対する勝利を必ず与えてくださるのだという揺るが  
ない信仰がダビデの心に喜びをもたらしていただけてはならず、その主を熱心に求め続けようとする思い  
をも生み出していたのです。そして彼はそのすばらしい主に対して、喜びのいけにえをささげて賛美を  
してほめたたえようとしていました。ダビデは自分の主がどのような存在かということ思い返し続け  
ていただけてはならず、その真理を心に思い巡らして、そこに喜びを見出そうとしていました。主がど  
れほど偉大で麗しいお方なのかということを知っていたからこそ、彼は何よりもただその方を求めよ  
うとしたのです。

皆さん、覚えていないといけないのは、主がダビデの苦しみに対して助けや解決策を与えられたから  
彼はこのようにふるまったのではなかった、ということです。このことばを発したときの彼は、まだ困  
難を抱えていました。しかし、それでも、主が必ず助けを与えてくださるという約束が彼の心を主に向  
けて、ただ主のうちに喜びを見出すという態度を生み出していたのです。私たちはどうでしょう？日々  
の生活の中で、私たちもそれぞれにいろいろなことを望みながら歩んでいることと思います。仕事で成  
功することや健康、安心、財産や快適さ、また人とうまくやっていくこと…挙げればキリはありません  
し、それ自体が悪いわけではありません。でも、はたして私たちは何に一番の喜びや楽しみを見出そう  
としているのでしょうか？何を一番に求めようとしているのでしょうか？ダビデは、主こそが最高の喜びを  
もたらしてくれる存在であると自分のこととして知っていたからこそ、この方といつもともにいるこ  
とを求め続けていました。皆さん、私たちも同じように主に信頼して歩むことができます。偉大な力あ  
る主がご自分の者たちに、悩みの日には必ず助けを与え、勝利を与えてくださると信頼することができ  
るのです。これほどすばらしい主がともにいてくださるのなら、私たちもダビデと同じように願いませ

んか？「私は一つのことを…願った。…いのちの日の限り、【主】の家に住むことを。」と。主の姿に喜びを見出し続けること、これが、主を待ち望むために必要な二つ目の態度でした。

### 3. 主の教えに従い続けること 7-12節

三つ目に、主を待ち望むために必要な態度が7-12節に記されています。三つ目の態度は、「主の教えに従い続けること」です。ダビデはまず7-10節でこのように述べていました。よくことばを見てください。「:7 聞いてください。【主】よ。私の呼ぶこの声を。私をあわれみ、私に答えてください。:8 あなたに代わって、私の心は申します。「わたしの顔を、慕い求めよ。」と。【主】よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。:9 どうか、御顔を私に隠さないでください。あなたのしもべを、怒って、押しのけないでください。あなたは私の助けです。私を見放さないでください。見捨てないでください。私の救いの神。:10 私の父、私の母が、私を見捨てるときは、【主】が私を取り上げてくださる。」

▶「主の御顔を慕い求める」（cf. 詩篇105:4「【主】とその御力を尋ね求めよ。絶えず御顔を慕い求めよ。」）

この部分を読んで、皆さんは率直にどんな感じを受けましたか？これまで見てきたダビデの姿とは大きく違うと思いませんか？ここでくり返し用いられていた「主の御顔を慕い求める」という表現自体は、主のあわれみや、恵み、御力や臨在というものを求めるときに使われる表現の一つでした。ですから、苦難の中に置かれていたダビデは、今までと確かに変わらず主を見上げて、主のあわれみによる助けを求めてはいたのです。でも、彼の様子はこれまでとは異なっていました。「私を見放さないでください。見捨てないでください。」こんなことばを耳にすれば、まるでダビデがこれまで持っていたその確信すべてを失ってしまったかのように、希望というものを失ってしまったかのように感じませんか？ダビデは最初、確かに主は私の光なのだ、私の救いなのだ、私のいのちのとりでなのだ、とそう信頼して、私はだれを恐れようと確信を置いて歩んでいました。でも、ここではまるで彼が弱り切ってしまうと、涙を流しながら主の前に懇願しているような姿を見ることができるようなのです。いったい彼のうちに何があったのでしょうか？置かれていた状況があまりにも苦しいものだったので、彼の信仰が弱っていたのかもしれない。期待をして祈りをささげていたけれども、その祈りに対する主の答えがいつまでもなかったのかもしれない。彼自身が、自分自身の罪深さということを知っていたので、不安になっていたのかもしれない。自分は主の麗しさを仰ぎ見て主の助けを求めたい、でも自分のことを考えれば、自分は殺人や姦淫の罪を犯したそんな罪人だ、神様はこんな自分の祈りに答えてくださるのだろうか…？もしかしたらこんな自分を見捨ててしまうのではないだろうか…？それがどんな理由であろうと、彼の心には不安が生じていました。だからこそ、彼は主に熱心に祈り求めるのです。7節「聞いてください。」

【主】よ。私の呼ぶこの声を。私をあわれみ、私に答えて下さい。」本来なら神様の恵みに何も値しない存在であることをダビデはわかっていました。ただ、主のあわれみや恵みが自分には必要なのだと訴えていたのです。ダビデの心には不安が生み出されています。このダビデの姿こそが、私たちの姿だと思いませんか？私たちも主に確信を置いて歩もうとした次の瞬間に、いろいろな周りの状況や問題によって不安や恐れを抱いてしまうことがあります。朝起きて主を見上げ喜びに満ちあふれていたとしても、昼間いろいろなことを経験し職場や家庭で難しさを覚え、夜には疲れ切つて不満を覚え恐れを覚え、次の日に対する心配事で頭を悩ませているかもしれません。主が祈りに答えてくださらないことによって、まるで主が自分から遠く離れて見捨てられたかのように感じることもあるかもしれません。詳しいことはわかりませんが、ダビデも同じような思いを抱いて揺らいでいました。しかし、そのような状況の中にあっても、彼は主に対する信頼を完全に失うことはなかったのです。主に対する確信は、変わらず彼のうちに存在していました。だからこそ、彼のこんなことばを8節以降に見ることができます。8節の最後にはこう書かれていました。「:8…【主】よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。:9 どうか、御顔を私に隠さないでください。あなたのしもべを、怒って、押しのけないでください。あなたは私の助けです。私を見放

さないでください。見捨てないでください。私の救いの神。」ダビデの心を騒がせ彼の心を曇らせるようなものは、周りにも彼自身の心の内にも数多くありました。そのような思いに心が奪われて、恐れや悲しみに暮れてしまうことも容易にありえたでしょう。でも、彼はその中で主のあわれみを祈り求めました。主がこれまで自分の助け主としていてくださったことを、主がこれまで自分の救いの神としてどんなときにもともにいてくださったことを覚えて、その姿に心を留め続けていたのです。またそれに加えて10節では「私の父、私の母が、私を見捨てるときは、【主】が私を取り上げてくださる。」と語っています。実際にダビデの両親がダビデのことを見捨てたという描写に関しては、聖書の中で見ることはできません。むしろその逆に、ダビデがサウルに追われているときに彼と両親と一緒にいた様子は、1サムエル記22：1に見ることができます。「ダビデはそこを去って、アドラムのほら穴に避難した。彼の兄弟たちや、彼の父の家のみな者が、これを聞いて、そのダビデのところの下って来た。」と。（ぜひ時間があるときに22章読んでみてください。両親がそこに記されています。）では、ダビデは10節で何を言わんとしたのでしょうか？「自分の父母が見捨てるときは、主が取り上げてくださる。」ということをもっと簡潔に言うなら「この地上にあって最も親密で固く結びついている親子の関係がたとえ絶たれることがあったとしても、主はご自分の者たちを絶対に、絶対に見捨てることはしない。」ということです。親が子を大きな愛で愛していること以上に、ご自身の子どもたちに対する神様の愛は大きいということです。ダビデはそのことをよくわかっていました。たとえ、友が自分を裏切って、父や母でさえ自分を捨てることがあったとしても、神様はいつもともにいてくださるとそう確信を置いていたのです。この「私を取り上げてくださる」という10節の最後のことは、「世話をしてくれる」とか「必要満たしてくれる」といった意味が含まれています。まるで捨てられた孤児が愛にあふれた里親の手によって引き取られて育てられるかのように、主はさまざまなものによって傷ついて無力で捨てられたような者に対して愛を示してくださる、というわけです。ダビデはそのような主の姿に思いを留めていました。だからこそ、彼の心は希望を失うことがなかったのです。

私たちも同じです。いろいろな苦痛の中で、周りの人が理解してくれずに自分から離れてしまって孤独を感じることもあるかもしれません。自分ではどうすることもできない問題で、自分の無力さを覚えてしまうこともあるかもしれません。でもそんな時にも、私たちの主は決して私たちを離れずに私たちを捨てることはないというこの真理を覚えることができるのです。どのような状況にあらうとも、主が私たちを取り上げてくださるのだということ。この方を信頼してこの約束に確信を置いて、そこに平安を見出すことです。ダビデはこうして主の約束に信頼して、たとえ困難な状況にあったとしても変わらずに主に確信を置いていました。

でもここで同時に注目してほしいのは、彼の持っていた確信というのは、確信で終わることはなかった、ということです。そうではなくて、彼の確信は、彼のうちに主の教えに対する従順さを生み出していました。だから11、12節にこう続いています。「：11 【主】よ。あなたの道を私に教えてください。私を待ち伏せている者どもがおりますから、私を平らな小道に導いてください。：12 私を、私の仇の意のままに、させないでください。偽りの証人どもが私に立ち向かい、暴言を吐いているのです。」と。主に信頼していたダビデは、主の道を自分に教えてください、と願っていました。主への揺るがない信頼は、ダビデのうちに「従順さ」を、もっと言えば、彼のうちに主により頼んで生きていかなければいけないという「謙遜さ」を生み出していたというわけです。これは非常に大切なポイントでした。もし、ある人が本当に神様に確信を置いてより頼んでいるのなら、自分には神様の助けがなければ絶対に正しい道を歩めないとわかっているなら、その人は神様の導きやさとしをみことばのうちに熱心に求めようとするのです。もしかしたら、困難の中で私たちが陥ってしまう一つの危険は、この点かもしれません。それは、状況に心が奪われてしまって自分が中心になってしまうことがあるのです。私はこのようにしたい、私はこれが正しいと思う、この状況は私には気に食わない、神様はどうして私をこんな苦しみに合わせら



れるのだろうか？私たちが困難な状況に置かれるときに、はたして私たちはダビデのように祈ろうとするでしょうか？神様、あなたの道を私に教えてください、私にはどう歩めばよいかわかりません、ですから私にあなたの道を教えてください、私の思いではなくてあなたのみこころがなされますように…と求めているのでしょうか？それとも、自分の考えがいつも最善だと考え、神様がそれを叶えてくださるようにと求めているのでしょうか？私たち自身が考える問題の解決策や快適さや安心を手にするために、自分のして欲しいことを神様に願わないのでしょうか？もちろん神様に自分自身の願いや思いを打ち明けることは間違っていないです。でも、もし私たちの思いや考えが、神様の思いや考えよりも大きくなっているのだとすれば、私たちの願いが神様のみこころよりも優先されているのだとすれば、その祈りの姿勢というものは間違っているのです。私たちは自分の望むようではなく、神様が望まれるように生きていく者へと変えられました。そして、神様だけが私たちを揺るがない安定した平らな道に導くことができる、私たちは知っているのです。それならば、私たちに必要なのは、主の導きであり、主のみことばです。ダビデのように主の約束に確信を置いて、みことばを通して与えられる導きに忠実に従いながら歩み続けていくことです。「主の教えに従い続けること」、これが主を待ち望むために必要な三つ目の態度でした。

#### 4. 主の姿を自分自身に語り続けること 13-14節

そして最後、主を待ち望むために必要な四つ目の態度が13-14節に記されていました。四つ目の態度は「主の姿を自分自身に語り続けること」です。ダビデは最後にこのようにまとめていました。

「:13 ああ、私に、生ける者の地で【主】のいつくしみを見るのが信じられなかったなら—:14 待ち望め。

【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。」私たちはこの詩篇を通して、ダビデが主を見上げて確信に満ちあふれていた様子から、心が騒いで不安を覚えていた様子までを見ました。ダビデも、私たちと同じようにさまざまな問題によって思いや気持ちが揺らいでしまうことがあったのです。でも最後には、彼の心は主にあって確かな確信を抱いていました。13節「ああ、私に、生ける者の地で【主】のいつくしみを見るのが信じられなかったなら—」と。これは、彼が主のいつくしみを見ることに対して疑いを抱いていたのでも、それを信じられなかったのではありません。彼は「もし、自分が主のいつくしみを見ると信じることができなかつたとしたら、そのときは想像もしたくないけれど、最悪の状態になっていただろう。」と口にしたにすぎません。その通りですね。もし、彼がこの詩篇に自分で描いていたその主の姿を信じるができなかつたとしたら、彼はどうなっていたでしょう。間違いなく、彼は主以外の何かに助けを見出そうともがき苦しんで、困難の中で失望を覚えていたでしょう。信じるができなかつたなら、平な主の小道に平安を見出すことなく、絶え間のない危険や敵の攻撃によって恐れや不安でいっぱいになっていたでしょう。でもダビデはそうではありませんでした。彼は主を疑うのではなく、必ずこの地上で、主のあわれみや恵み、いつくしみを味わうのだと固く信じていたのです。主の変わらないご性質と誠実な約束にいつも確信を置いていたからこそ、彼はどんな状況にあっても喜びに満ちた歩みをすることができました。そしてその確信を持っていたダビデだからこそ、彼は自分自身に言い聞かせるのです。14節で「待ち望め。【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。」と。彼は自分の心に語っていました。「あきらめずに、主を待ち望みなさい。主は、これまでも、これから、自分のみこころにかなったことを成し遂げられる。今は自分には理解できなかつたとしても、主はご自分を愛する者にとって益となることを必ず成し遂げられる。だから不安になって疑うんじゃないんだ。揺らぐことなく主に信頼しなさい。」と。ダビデはこうして真理をもって、自分の心が主に立ち続けることができるように励まし続けていたのです。自分の心に真理を語り続けていました。これは私たちにとっても必要なことです。私たちの心もいろいろなもので騒いでしまうことがあります。疑いや不安を抱かせるような問題が周りにたくさんあふれています。私たち自身のうちを見ても、そこには罪が存在していて、その罪が神様以外のものに目を向けるようにと仕向けること

もあります。主を待ち望むことよりも、自分の願いや望みを優先するよといつた誘惑もあるので。だからこそ、私たちも自分自身に語り続けることが大切です。「主がどれほど偉大なお方かを思い出せ！恐れや不安もやってくるし、自分には理解できないこともある。主を疑うよといつた誘惑も生じてくる。でもそんなときこそ、心を強くしよう。主のご性質と主の姿、主の約束を思い出そう。自分の気持ちや思いではなくて、みことばに従おう。主だけが自分の希望であつて、主がともにいてくださればだれをも恐れる必要はない。どんなときも、絶えず主を待ち望み続けよう！」このよに自分自身にみことばで示されている真理を語り続けること。こうして信仰者はどんな恐れや不安に対しても立ち向かうことができます。皆さん、ダビデは一つも自分のうちに力を見出そうとしていませんでした。彼は常に神様に目を向けようとしていました。私たちのうちに力や知恵があるから、私たちがどのような問題にも立ち向かうことができるのではないのです。ただ力ある主が私たちともにいてくださるからこそ、私たちはそのような状況になつても喜びを見出すことができます。

思い返してみれば、ヨシユアに対しても主が同じよに言われていました。ヨシユア 1 : 9 で「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、【主】が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」と。「覚えていなさい。私があなたとともにいるのだ」と。そのことをヨシユアも覚え続けることが必要でした。ダビデも覚え続ける必要がありました。私たちも自分自身に語り続ける必要があるのです。主が私たちとともにいてくださるからこそ、私たちは主をいつも待ち望み続けることができます。

## ○まとめ

ですから、もしまだこの中に神様と個人的な関係を持っていない方がおられるなら、この神様を知らない方がおられるなら、きょう私たちが見てきたこの詩篇に記されていることは、今はあなたのもではありません。今あなたは自分の力でいろいろな困難に立ち向かつていて、その中で、恐れや不安というものに絶えず襲われているかもしれません。でも、そのような生き方をし続ける必要はないのです。あなたもこの神様と個人的な関係を持つことができます。どのよにしてか？それは唯一イエス・キリストを通してです。ただ神の御子イエス・キリストを通して、この救い主の十字架の死と復活だけが、あなたの罪を洗い流して、罪によって壊された神様との関係を修復することができるのです。だからこそ、きょうまだこの主を知らない方がおられるなら、神様に逆らつてきたその自分の罪を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れてください。自分のために生きてきた生き方をやめて、主に従つて主のために生きる人生を始めてください。イエス様はこのよな約束を与えておられました。マタイ 11 : 28 に「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と。どうか、きょうというこの日に、この主を信じて、そしてこの主にある救いの喜びを、この主にある平安をあなたのものにしてください。

今、主を信じて歩まれている兄弟姉妹の皆さん、確かに私たちの日々の歩みにはさまざまな困難や難しさがあります。みなそれぞれにいろいろな苦しみを経験して、恐れや不安を覚えることもあります。そして、今だけではなく、この先にもそのような試練は必ず待ち受けているのです。でも、私たちはどんなときにあつても、主のうちに確信を見出すことができます。ダビデは言っていました。「【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。」と。皆さん、主がともにいてくだされば、私たちは恐れる必要はありません。主の姿を思い起こしてこの主の姿に喜びを見出し続けること。ご自分の子どもを決して決して見捨てることはなく、必ず助けを与えてくださる、という主の誠実なことばを覚え続けること。そして、主の姿と、変わらない約束を、自分自身の心にいつも語り続けること。「待ち望め。【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。」どのよなときも忍耐を持って主を待ち望み続ける者として、ますますともに成長していきましょう。